



科学史における文化と文明：ニーダム史観、ナショナリズムという文明論の陰路、そして申東源プロジェクトの狙うところ（についての一考察）

塚原，東吾

(Citation)

Proceedings for Korea-Japan History of Science Seminar, 7:177-181

(Issue Date)

2017-03

(Resource Type)

conference paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005687>



科学史における文化と文明：

ニーダム史観、ナショナリズムという文明論の隘路、 そして申東源プロジェクトの狙うところ（についての一考察）

塚原東吾（神戸大学）

科学史における「文明主義」

科学史家のカピール・ラジは、近年の科学史は、西欧中心主義の轍にはまっているという批判を展開している。（カピール・ラジ、水谷智ほか訳『近代科学のリロケーション：南アジアとヨーロッパにおける知の循環と構築』、名古屋大学出版会、2016年。原書は、Kapil Raj, Relocating Modern Science: Circulation and the Construction of Knowledge in South Asia and Europe, 1650-1900, Palgrave Macmillan, 2007）

このように近年の科学史が、一般に、西欧中心主義的な傾向にある理由を、ジョセフ・ニーダムによる「文明主義」と、ジョージ・バサラの「波及主義」にあるとしている。

ここで論じられているニーダムの「文明主義」とは、大著『中国の科学と文明』を貫く問題意識でもある、「なぜ中国には、近代科学が生まれなかったのか？」という、いわゆる「ニーダム・クエスチョン」にもっとも集約的に表現されているものであるという。つまりこのような発問形式のなかには、「諸文明の科学技術の成果の集約点・到達点として」、ヨーロッパ文明のみが、（近代科学を生み出した）文明であるという観点をすでに暗示的に含んでいるのだという。

また「波及主義」とは、「植民地科学の3段階説」で、これも近代西欧科学が、どのように非西欧世界に波及し、そこから土着のプロセスを経ながらも自立へ向けて段階的に発展していくモデルを想定しており、ヨーロッパ科学の受容と展開のみが、非西欧における科学であるという想定に基づいているとしている。

本発表では、このような近年のヒストリオグラフィーについての議論をもとにして、申東源が中心となっている『韓国の科学と文明』シリーズについて、検討したい。

結論を先にいうなら、『韓国の科学と文明』というシリーズが、「科学と文明」という枠組み設定を持つことは、韓国科学史のなかで長年にわたって繰り広げられたというナショナリズム論争を踏まえたもので

ありながら、同時にまた「科学と文化」という枠組みをもう一方におさえたような形の、いわば「双頭の鷲」にも似た形のヒストリオグラフィーを持つものではないのかと考えている。

そのうえで、申東源のプロジェクトは、ニーダムの『中国の科学と文明』のモデルを、単に韓国の場合に移し替えただけではなく、韓国独自の歴史論争や思想的文脈、そして地政学的な配置のなかで、地理空間的・歴史時間的な「韓国（韓半島）」をめぐる知の循環・遭遇や生成（circulation, encounter and generation）を扱い、その結果生まれ、そして継承されている新たな混交性（hybridity）を、大胆かつ細緻に至るまで記述しようと努力を重ねたものであると思われる。

すなわち、ここでは、申東源を現代韓国におけるニーダムであるとするだけでなく、この現代韓国に立ち降りたニーダムが、このように「おかれた状況（situatedness）」のなかで、どのような手法をここに展開しようとしているのかについて、まことに僭越ながら、ここでは浅学菲才を顧みずに考察してみたい。

ヒストリオグラフィー（歴史観）を検討する必要性

ここでひとつ、白状しておかなければならないことがある。この発表者（塚原）は、韓国科学史について、実証的な面では専門的にオリジナリティをクレームできるような研究はほとんど全くしていないということである。つまり、ここでの報告は、あまり中身（史実そのものへの言及）のないものなので、実は、この韓日科学史セミナーに雲集された錚々たる碩学の前で、まったく恐縮しているのだが、ここでは拙い管見を披歴して、諸賢からのご批判を乞いたいと考えている。

まずは歴史研究における事実関係（史実について）というより、歴史観（もしくはヒストリオグラフィー）について、ここで若干のコメントを論じさせていただく、という形を試みる。それには理由がある。

歴史研究には、実証主義的・経験主義的でベーコニアンな歴史研究と、思想的・演繹的で、カルテシアンな歴史記述をめぐる研究（すなわちヒストリオグラフィーをめぐるもの）がある。

よく言われるようにこの2つは、歴史研究の「両輪」なのだろうか？

この比喻は、ちょっと、まずいかもしれないと考えている。なぜなら、両輪の場合、どちらかが欠如してはいけなし、2つともバランスよく、同じ大きさでないと、うまく走れないし、回せないからだ。（もちろん、これはこの比喻をそのまま考えるとき、軸の右左に2つのタイヤが付いているような場合と、自転車のように、前後についているような場合を想定できるだろう。左右の場合は、これは完全にまっすぐ走れないし、ほんの少しのゆがみでも、直進することは難しくなる。前後の場合には、一応は

なるとかなると思うが、やはり無理はできない。これについてはちょっとした図式をパワーポイントにしてあるので、それをもとに考えたい。)

だからむしろ、これらの2つを表現するためには、より適切な比喻が必要だろう。なぜなら、それらは両方とも、「それ自体」で成り立つ(とりあえず、なんとか成立するし、通用する)ことがあると、考えているからだ。実証的な歴史研究、文献を詳査したり、碑文を解析したり、文字通り発掘を行ったりするのは立派な歴史研究だし、書かれた歴史のスタイルやそこに書かれていない(裏にある)思想を読み解くことや、その歴史を書くためにとられたスタイルを検証することや、書くことを支えている制度、そして書いている者を育成してきた学問の思潮などを解析するのも、歴史研究の重要にして欠くべからざる要素であると考えている。

これは、かなりの論争的なポイントになる。歴史観なき実証は歴史ではないという主張もあるだろうし、歴史哲学論争なぞつまらない、本当の(本当の?)歴史ではない、という、いわゆる(汚い言葉で恐縮だが)「クソ実証」だけが歴史であるという信念を持つ人々にも、多く出会ってきた。筆者(塚原)は、これらの両方を、両方とも必要であるとする立場である。つまり、ある一方がほかの一方より優位性を主張したり、もしくは排除をしようとしたりするなら、それはよくない、ということを目指したい。

だからここは、「歴史研究の両輪」というタイヤの比喻をそのまま続けるとするなら、これはむしろ、自動車のエンジンとハンドル、と、とりあえずはしておこう。実証研究と歴史観についての検討は、「エンジンやタイヤなどの推進機構」と、「ハンドル・ブレーキなどの制御機構」の関係にあるとすれば、それはそれで、ちょうどいいかもしれないと考えているが、どうであろうか。歴史学におけるエンジンが「実証的な研究」で、歴史研究のハンドルが「ヒストリオグラフィの検討」であるというのが、塚原の(村上の比喻をバージョンアップさせた)、比喻である。(なお、自動車の比喻は、そもそも、村上陽一郎が、じゃっかん別の形で『科学者とは何か』(1994)のなかで使用したものである。ここではそれを、上記のようなパリエーションにしてみた。また村上陽一郎先生の80歳の記念のための論集で、村上の著作における「文化と文明」の概念について論じたので、これについては、以下を参照: 塚原東吾、「村上陽一郎の日本科学史: 出発点と転回、そして限界」、柿原泰・加藤茂生・川田勝編著、『村上陽一郎の科学論: 批判と応答』(2016)に所収。)

この比喻の心は、ハンドルのない(もしくはハンドルが壊れている)自動車には乗りたくないが、エンジンのおかしい車では走りが心もとない、というものである。

韓国科学史におけるナショナリズム論争と「文化」

現代韓国においての科学史を考える際に、まずは韓国科学史のなかでかなり激しい議論になっていたというのが、ナショナリズム論争であったということは、最初に注目すべきことだろう。それは全相渾先生の先駆的な科学史(『韓国科学技術史研究』など)に対する金永殖先生の議論、さらに、イム・ジョン

テ先生による、ボルチモアでの全相運への批判などがあげられるだろう。ここではその全相運をディフェンスしたのがやはり韓国科学史の泰斗の一人である宋相庸先生であり、これは最近でも、2016年11月には、早稲田での日韓科学史ワークショップの席上、小生の報告の前に、宋先生が、強い口調で議論されたものである。このようなナショナリズム論争は、朝鮮（韓国、もしくは韓半島での）科学史のヒストリオグラフィーを語る際に、ひとつの重要な伏線になっていることは確認しなくてはならないだろう。

それに加え、ジョセフ・ニーダムが、「中国の科学と文明」というシリーズを展開してきたことが20世紀後半には、科学史のひとつのスタンダードとして読まれるものになっていた。このシリーズを一つの準拠枠（パラダイム）としながら、21世紀の10年代の現在、「韓国（朝鮮）の科学と文明」というシリーズをプロジェクトにしている（申東源先生）というのが、大きなエポックである。

注意しておかなくてはならないのは、このような論争は韓国における（一般的な）ナショナリズム論争からだけで検討される性質の論争ではなく、「科学史」という、文化史の重要な領域から見るべきであって、そのことで、視野をより広くとること（すなわち国家という装置や制度についてだけではなく、科学（技術や医学の社会的な位置づけも含む）、文明そして文化という概念の規定するものや東アジア文化圏という広がりの中でのそれを構成する諸文化の位置づけの問題としても見ることができる）性質を備えたものであるということを、科学史という学問の前提として押さえておくべきであるということである。

そこで小生が言いたかったのは、このような「科学史」を、「非西欧」の立場で書くときに、「文化」の立場に立つ場合と、「文明」を僭称する場合がある。後者である「文明」を名乗るときは、ほぼ必ず、「対抗的」なものとなっていることは注目していいだろう。さらにこの僭称は、また「（文化の）階層性」を意識して、そのなかでの「優位性主張」ともなっている。（たとえば、ヨーロッパにのみ「文明」があるとした、20世紀中ごろのイギリスで、「中国文明」という概念を提唱したのだと考えていいだろう。）

だが、ニーダムは、中国を「文明」の担体としてきたのだが、新たな世代のニーダム学派（塚原もその末裔ですが）は、90年代に、「国家主義」であるという批判を受け、（むしろ、国家としての「中国」ではない、中国文化圏の科学史・技術史そして医学史も扱うので）、学会名・学会誌の名称を、「中国」から、「東アジア」にしたという経緯がある。

ここで参照しておくべきは京都に盤踞する（中国）科学史研究の一陣の動向である。京都の中国科学史、すなわち薮内学派においては、（中国）「文明」という自称は、時折、非常に散発的には見られるのだが、（たとえば、岩波新書の、薮内清、『中国の科学文明』（1970）など）、

逆に「文化」にこだわって科学史を語ってきた・探求してきたというスタイルのほうがより強く見られる。（これは、「日本の科学と文明」とは、薮内は敢えて言わない、というところにもみられる。中国について、薮内が「文明」（たとえば中国の科学文明）などというのは、ニーダムの影響であり、ニーダムにリスペクトを払ってのことだと考えていいだろう。ただ、「日本文明」という、これまた問題を多く含む概念については、ここでは論じきれないほど、物議を醸しているものなので、割愛しておきたい性質ものである。）

これらのことを踏まえて考えるなら、もうひとつ重要なこととして、心に留めておかないとイケナイことがある。それは「文明」を自称することは、「文化」が不当に貶められている場合、重要な「戦略的な意味」を持つということもあるということである。

これは、西欧中心主義にたいして「抵抗的」なかたちで、ニーダムは敢えて、「中国文明」を持ち出したとも歴史的に評価できる。

これは申東源先生の「韓国（朝鮮）の科学と文明」シリーズのなかでも、「中国の一部では『ない』、独自性を持つ、朝鮮（韓国）文明」、といういい方で、明確に示されている。

それと同時に、狭隘な国家主義、自文化中心主義に陥らないようにしたいという方向性も示されているのは、韓国の科学史学会での長年の論争を踏まえたものであると考えていいだろう。

以上、まとめるなら、申東源プロジェクトで、「韓国の科学と文明」という総タイトルで、「文明」を自称するのは、（１）戦略的なかたちでの、あるひとつの文化圏の独自性を主張するために必要なものであること、そして、（２）国家主義・自文化中心主義からの離脱を示す、という２つの面の要請を同時に満たすための「概念装置」であると考えられる、というのが、この稿の筆者の暫定的な主張である。

以上、浅学菲才を顧みず、碩学の諸氏の前で管見を披歴して「冷や汗」ものであるが、聴衆諸賢からのご批判、またご助言を伏して乞うものである。